ベスト・エッセイ

THE BEST ESSAY 2014

日本文藝家協会編

編纂委員
角田光代
林真理子
藤沢周
町田康
三浦しをん

アーサー・ビナード
淺川継太
浅田次郎
阿部賢一
池内紀
池澤夏樹
いしいしんじ
石川九楊
犬山紙子
井上荒野
上橋菜穂子
大浦康介
大竹聡
岡田美智男
小川恵
奥本大三郎
長田弘
岳真也
角田光代
金原瑞人
木内昇
岸本佐知子
金田一秀穂
倉本一宏
黒田夏子
小泉武夫
河野多恵子
後藤正治
小林恭二
五味文彦
佐伯啓思
酒井順子
坂上弘
佐藤雅彦
佐藤洋二郎
椎名誠
塩野七生
重金敦之
篠弘
篠田節子
柴田翔
諏訪部浩一
関川夏央
立花隆
谷川俊太郎
田丸公美子
津村記久子
中川李枝子
中沢新一
長島明夫
中納直子
中村桂子
野坂昭如
野谷文昭
林真理子
瞳みのる
平松洋子
藤沢周
藤野可織
藤山直樹
古岡孝信
別役実
穂村弘
又吉栄喜
町田康
三浦しをん
南伸坊
宮城谷昌光
三好徹
村田喜代子
やなせたかし
山極寿一
山本精一
湯本香樹実
養老孟司
よしもとばなな

光村図書

自由が丘の金田中

瞳みのる

「金田（かねだ）」という居酒屋が東京の東急東横線の自由が丘の駅近くにある。いつのころからか、「金田酒学校」という別称もあるそうだ。昭和の初めに創業して、すでに八十年近い歴史を重ねているという。私は最近まで、横浜の日吉にある学校に三十数年、教師として都内から勤務していたので、通勤途中にあたる自由が丘駅で下車して、ガードをくぐって、特に学校行事の後などは、教師・職員の面々と、よくこの店に繰り出したものである。

さて、私は一九六七年から、一九七一年まで、ザ・タイガースという音楽グループのメンバーの一人であった。このグループの活動は、東京を中心として四年あまりで終息し、私は故郷の京都に帰り、翌年、東京の大学に入り、大学院を経て教師となった。私を除く他のメンバーは、それぞれ芸能活動を続け、沢田研二はソロ歌手に、岸部一徳は俳優

として、その他のメンバーも各自の道を歩んできた。私はグループの解散後、思うところがあって、元のメンバーとは全く接触を絶った。しかし解散してから四十年近く経った二〇〇八年、私は当時のマネージャー、中井國二からの誘いにより、元のメンバーたちと再会することになった。その時の様子は、『ロング・グッバイのあとで』という本に書いた。

中井の話によると、長く芸能界との接触を避けていた私に会うために、沢田は件の「金田」に時折来ていたという。私がこの店の客である噂を、どこからか聞きつけていたのだろう。その上、森本太郎、沢田、岸部の三人は、共同で私に向けて、「ロング・グッバイ」という曲の作詞、作曲をして呼びかけ、これはテレビ番組でも放送された。その曲の最後の一節は、「永遠の今が続きならば、一度酒でも飲まないか」という。この部分は沢田が詞を書いたという。酒を飲む場所は、「金田」をイメージしていたのだろうか。そこで、ようやく、私は四十年近い空白を経て、昔の仲間に会う気になった。

すでに一部の活動は再開しているが、今年の十二月には加橋かつみを加えたザ・タイガース結成当時のメンバー全員が揃って、四十四年ぶりに公演が行われることになった。

直木賞作家の山口瞳は、この「金田」の常連であり、山口はこぢんまりした居酒屋の「金

田」を「自由が丘の金田中（かねたなか）」（「金田中」は東京築地の有名な料亭）、「わけ金田中」と呼んでいたそうだ。俳優で映画監督であった伊丹十三などもこの店をひいきにした。私には山口や伊丹の時代とはちょっと時間的にずれがあったので、これらの方々と同席した記憶はない。しかし、店ではすれ違いの客同士であった沢田とコンサートをやることになり、すれ違いの客同士であった山口の著書をあらためて読み直してみると、この店の一階カウンター席や二階の座敷を通して、人間関係や過去のある時代への想いや記憶が、プルーストの『失われた時を求めて』ではないが、鮮やかに立ち昇ってくる。

昭和三十年代後半を舞台とした山口の『江分利満氏の優雅な生活』も当時としては、現代サラリーマン物語であっただろうが、時を経て今となっては歴史文献としての齢を重ね、あらたな価値を持ってきていることをはっきりと感じる。私はこうして、時間軸を基準に、人の作品、人の行動、人の思いを自分のそれと重ね合わせ、知識や認識を広げることによって、単に時の移ろいというより、この空間を舞台や索引にして、人生の機微をひしひしと感じ、会ったことのない人や、冥界に行かれた人であっても、身近な存在であることを、夢想したり意識したりするのだ。山口にとっての「自由が丘の金田中」とは、すなわち「自分にとっての金田中」、「自分の収入でも行ける金田中」ということ

9784895287371
ISBN978-4-89528-737-1
C0095 ¥2000E
定価：本体2,000円＋税
光村図書
1920095020006

描かれた言葉から、
その人の生の片鱗が見え、
その向こうに、
今という時代の横顔が見えてくる。
エッセイを読むということは、
生身のだれかに出会うことと、
とてもよく似ている。

本書編纂委員・角田光代